なるかわしんごさん

◉絵本作家

「おかしいな」と思う違和感を大事にして誰かに「助けて」と言える社会であってほしい

セリフのない絵本を全国の親子に届けている絵本作家・なるかわしんごさん。創作の傍ら、子育て支援拠点や子育てひろば、保育園などでも親子を対象としたワークショップを通して児童虐待を予防する活動をしている。赤ちゃん訪問の際、なるかわさんの絵本を配布する自治体も。なるかわさんが絵本作家になろうと思った背景、そして、いまの社会への願いを聞いた。

●取材・文……太田美由紀（ライター）

自分が本当にやりたいこと それが絵本作家だった

なるかわさんが社会に対して違和感を持ったのは10代の頃だった。大人たちが口にする「そんなことでは社会に通用しない」という言葉に、「そんな社会なら入りたくない」とずっと思っていた。

「僕が10代の頃、自殺者が3万人と言われていました。『自ら死ぬ選択をしなきゃいけない社会って終わってる』と感じていました。未来に希望を持てなければ死にたくなるのも分かる、とも思っていた」

小学校の頃から絵を描くことが好きだった。成績表も、図工と体育はいつも二重丸。中学でも評価はずっと5だ。しかし、大学では経済や経営を学んだ。大学のキャリア説明会で、大手企業に就職したOBの就職活動のお手本のような話を聞いていると き、疑問が湧いて、手を上げた。

「その会社に入ったから幸せになるということではありませんよね」

その問いかけにOBは答えてくれず、キャリアセンターの人にひどく怒られ、その後一切の説明会に出入り禁止になった。

「自分が持った違和感や疑問を表明しただけなのに、それを封殺しようとする大人の動きがとても嫌でした。そのOBは後日、会社を辞めたと連絡をくれました。耐えられなかったと。先輩たちも成功者として話をさせられていたんです。そんな、魂が置いていかれるようなシステマチックな社会に嫌気が差していました」

それでも社会に順応して生きていこうとひとまず商社に入ったが、1年で辞めた。

絵を描くことは 自分を回復させる作業

「親や社会に求められることではなく、自分が本当にやりたいと思うことをやろう。ずっと好きだった絵を仕事にしよう」

保育士だった母はよく読み聞かせをしてくれた。そのことが強く印象に残っていた。

24歳のとき、絵本作家になろうと決めた。

どうすれば絵本作家になれるのかも全く分からないまま、アルバイトを掛け持ちし、休日は8時間喫茶店に陣取った。出版するあてもない絵本をひたすら描き続けた。

「絵を描くことは、自分を回復させていくような作業だったと思います」

低出生体重児として生まれたなるかわさんは、幼い頃は体が弱く、130センチくらいまでしか背が伸びないと言われていた。母はそんな子を産んでしまったという申し訳なさを抱え、父はなるかわさんがいじめられても耐えられるようにと願った。

「食事中に父の箸の先がピュッと目の前に飛び出してくる。急に海に放り込まれる。高層ビルの屋上で急に持ち上げられる。それに動じたら怒られるんです。いつ何が起こるか分からない状態にビクビクしていたけれど、それを悟られても怒られる。振り返ると、修行のような日々でした」

なるかわさんは、徐々に自分の気持ちを表すことさえできなくなっていった。

「お父さんは嫌い、お母さんは好きということさえ表すことができなかった。母が困らないように、自分の気持ちを抑圧していきました。野球を始めても、チームの監督より先に父の平手打ちや腹蹴りが飛んでき

Profile

●なるかわ・しんご●

1989年、三重県生まれ。中京大学卒業後、専門商社に入社し1年で退社。アルバイトをしながら24歳から絵本を描き始める。2015年児童虐待予防推進事業「子はたからプロジェクト」を発足。活動を続け2022年愛知県名古屋市を拠点とする「NPO法人ひだまりの丘」副理事長に就任。親子を対象として、セリフのない絵本を使った創作体験もできるワークショップを全国で行っている。

た。でも外から見れば普通の家族だった」

絵本を描くと自分で決めたことが、自分で踏み出した初めての大きな一歩だった。

「初めの頃は、自己決定したことを誰かに肯定してほしいという気持ちが強かったと思います。後先考えず絵本作家になろうと決めて、生き方を誰にも否定されないように自分を守るために城を作ったんです」

絵本作家を目指し始めて1年半がたった頃、絵本作家の荒井良二氏と出会った。

「君は絵本描きたいのかね」

「はい」

「ああ、じゃあなれるよ。やり続けたやつが絵本作家になるんだよ」

それでいいんだと言われたような気がして、とにかく無我夢中で描き続けた。

子どもの頃のことは虐待だったと気がついた

学童保育のスタッフとして日中は子どもたちと触れ合い、夜は絵本を描いていた時期もある。保育園で絵本を使ったワークショップもその頃から始めていた。

「学童保育では、3年生くらいで噛みつく子がいたり、5年生で膝に乗せてあげないと宿題ができない子がいたりすることに違和感を感じました。虐待のニュースにも目が止まった。そういうことが自分の中でバチンと重なりました。それまで、自分が育ってきた環境は虐待だとは思わずに過ごしていたんです。親に対してひどいとか憎いとか思ってはいけないというバイアスがかかっていたと思います」

ちょうどその頃、ある知人に、「東海若手起業塾」への応募を勧められた。東海地方で地域や社会を変える挑戦をする起業家を支援するプログラムだ。NPOを立ち上げた社会活動家も多く輩出している。

「起業なんて頭になくて、自分がその頃抱えていた思いをただエントリーシートに書き綴ったら、本採用ではなく研究枠に入れてくださいました。こいつは放っておけないと思ってくださったようで。そこで審査員の方たちとお話しする中で、自分は虐待を受けていたことに気がつきました」

研究枠としてサポートを受け、虐待のメカニズムを研究している論文を読み漁った。三重県立看護大学の宮崎つた子氏の、育児ストレスの構造研究にたどり着いた。

「半年間、世の中でどんな問題が起こっていて、それに対して僕にできることは何かを整理する機会をいただきました」

実際のワークショップの様子　（写真提供：なるかわしんごさん）

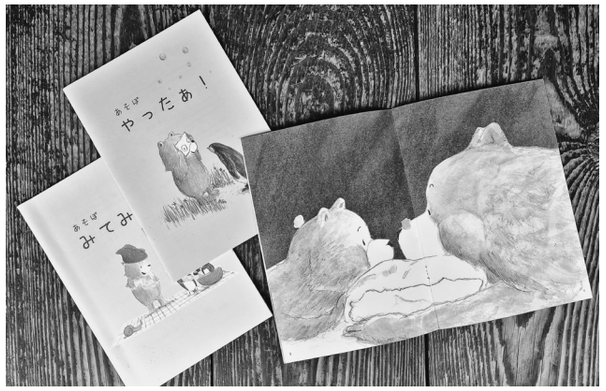
児童相談所につながるケースでは絵本作家にできることはない。そこで可能性を見出したのが母子保健分野だった。

「多胎児や医療的ケアの必要な子がいるなどリスクの高い家庭は手を差し伸べてもらえますが、普通の家庭は手を挙げないと助けてもらえない。自分の状況を客観的に認識して助けてと声を上げなければならない。だから、子育てをしている全ての人に絵本を届け、そこに必要な情報も分かりやすく載せておくことを思いつきました」

同塾でメンターを務めていたNPO法人ケアセンター・やわらぎ石川治江氏と出会い「子はたからプロジェクト」を発足した。そうしてできた絵本が『あそぼ　あっぷっぷ』。やわらかいタッチのクマの親子は、性別が分からない。セリフはなく、親子で絵本を見ながらお話を作る。外国語を母語とする人にも使ってもらえそうだ。ペットボトルや新聞紙などで遊ぶ「あそぼレシピ」は遊びのヒントになる。

そして最後に、「たすけびと」という記入欄に、困ったときの相談先を書き込める。行政の相談窓口、子育て支援団体、保育園や預かり施設、電話相談窓口――。連絡先を記入して配布する自治体もあるという。

「関係性のできていない場所に行くこと、人に会いに行くことはハードルが高い。自分の子育てが評価されるんじゃないかという怖さも働き、足は遠のきます。でも絵本を何度も子どもと読むうちに、ここなら安心して相談に行けそうだなと思ってほしい。赤ちゃん訪問のときにこれを届けてもらえるとうれしいですね」



【セリフのないえほん】『あそぼ　あっぷっぷ』『あそぼ　やったあ！』『あそぼ　みてみて！』（税込各330円）。
https://hidamari-oka.org/onlineshop/から購入できる

「しんどい」と表現したら聞いてもらえる社会に

絵本はこれまで、助成金や自治体に購入してもらうことで必要な人に無料で届けられてきた。インターネットでも購入できる。

子育て支援拠点や子育てひろば、保育園などで開催している親子を対象にしたワークショップも人気だ。

「僕もいま、7歳と2歳の子を育てていますが、子育てって本当に大変です。誰もが持っている困難や大変さに共感できることをちゃんと描いた作品を作りたいと思っています。読む人の心の中に、何か行動が変わるときのエネルギーや勇気の糧になるようなものを描けるといいな」

子どもたちは自分の家族しか知らず、これが当たり前だと思う中で育っていることが多い。子どもが声を上げることができ、その前に子育てに悩む親を助けられるような社会になることを願って活動している。

「いま、虐待や親の不在で社会的養護を受ける子どもの意見を代弁する〝アドボケイト（代弁者）〟が注目されていますが、子どもの本当の声を大事にしてほしい。子どもの声ってそんな簡単に聞けないんだよと分かってもらいたくて、『言ってやるもんか、僕の気持ち』という絵本を作っています。完成は秋ぐらいになると思います」

いま、絵本は自己表現ではなく、目の前の誰かのために作るものになってきた。

「おかしいなという自分の中の違和感を大事にできる社会、それを『しんどい』『助けて』と表現したときに、聞いてもらえる社会であってほしい。みんな無理して頑張るんじゃなくて、お互いさまでやっていけるほうが良くないっすかね、っていうゆるいスタンスでやっていきたいと思います」